

## 飛鳥井雅有『嵯峨の通ひ』の方法

— 事実の改変と成立時期について —

河 野 有 貴 子

## 一、はじめに

飛鳥井雅有の二番目の日記作品『嵯峨の通ひ』は、文永六年（一二六九）の嵯峨の中院においての藤原為家、阿仏尼夫妻の様子を知る資料、そして鎌倉中期の古典講読の様子を伝える記録書という見方がされてきた。本稿では、作品に伴う事実の改変という視点で『嵯峨の通ひ』を見、記録としてだけでなく、本日記作品が虚構を織り交ぜて、雅有が物語的に造型しようとしている様を考察していく。また、文永六年の記事内容を主とする作品であるが、その成立時期は七年に入ってからであったとみられることについても言及したい。

## 二、成立時期と趣向

『嵯峨の通ひ』の記事内容の年次は文永六年（一二六九）である。文永六年であるという根拠の一つに、『嵯峨の通ひ』九月二十一日に為家の年齢が「七十二の老入道」と記されている点があり、建久九（一二九八）年生まれの為家は文永六年当時七十二歳である。二つに、十月一日に中院で詠んだ冬五十首歌の法眼良珍の歌にある雅有の注記がある。

冬無常

鳥辺山かたみの雲はしぐるれど消たぬ煙の果てぞかなしき

此歌は、月花門院の御乳母のゆかりにて、御仏事など取り沙汰する人なり。今日もその御月忌にて、御仏事して返りさまに立ち寄りられたり。

〔嵯峨の通ひ〕<sup>①</sup>

後嵯峨院の第一皇女である綾子内親王・月花門女院は、文永六年三月一日に二十三歳で没しており、同年の十月一日はその月忌に当たると。三つに、雅有の家集「隣女和歌集」巻二の巻頭に「自文永二年至文永六年」と所収歌の範囲が記載されており、その巻二と共通する歌が『嵯峨の通ひ』の歌三十五首のうち七首あることである。以上三つの点から、『嵯峨の通ひ』は、日付の付された文永六年の九月十三日から十一月二十八日までの記事なのである。

『嵯峨の通ひ』の記事内容と成立時期は別である。雅有の作品は日々の出来事を書き留めたものに、題名をつけてまとめ上げた時点を成立時期と考える。水川喜夫氏は、「但、著作年月は不明。推定すれば、毎日ではないであろうが、心に留まる出来事は書き留め、『最上の河路』の旅（文永七年）に出るまでの間に纏めたのではなからうか。」と推測され、成立時期については概ねこの考え方がされている。「もがみの河路」は、『嵯峨の通ひ』の次に雅有が記した作品であり、「例のうかれたる身は、倭文の苧環繰り返しつ、上れば下るに」と起筆され、何度も京都と鎌倉とを行き来する自らの様を記す。十七首の歌が配されており、そのうち十六首が家集巻三の歌と重なる。この巻三が、文永七年から八年の歌を所収していることと、文永七年十二月に下向したことが分かる歌が家集に見えることから、雅有が『もがみの河路』に残したのは、『嵯峨の通ひ』の翌年の文永七年冬にあつた下向である。

これらの事実を踏まえて、『嵯峨の通ひ』の文永六年十一月二十日の記事を見たい。

廿日、宿木の残り、東屋果てぬ。書写法眼、いまだ野寄にも帰られずして、京に居られたれば、文を奉る。

やうくの戯言いひ、下り近き由書きて、奥に

① 別れなん後ぞ知らる、同じ世の都の中も隔て有る身は

返し

② 同じ世の隔てもつらし嶺の雲誰が心よりか、り初めけん

また久しく障る事どもありて会はぬ人のもとへ申し遣り侍りし。

③ 芦分くるみなとの小舟うきふしに障りがちなる程を恨むな

返し

④ 芦分くるみなとの小舟さもこそは思はぬ方の障るなるらめ

(「嵯峨の通ひ」)

『源氏物語』の講読は、前日の宿木の残りと東屋が終わった。嵯峨に通い講読を受ける日々を記す『嵯峨の通ひ』の記事内容も残り僅かになった頃、雅有は二人の人物と別れの歌を交わしたことを記している。一人は、野寄に住む書写法眼（良珍）、もう一人は恋人であろうか「久しく障る事どもありて会はぬ人」、長く差し障りがあつて会えなかつたという人物である。

二つの贈答歌のうち、「久しく障る事どもありて会はぬ人」へ雅有が贈った③の歌が家集に見える。

寄舟恋

1477 あしわくるみなとの舟うきふしにさはりがちなるほどをうらむる

(「隣女和歌集」第三卷・恋)

雅有詠のこの歌が、家集卷三に所収されている歌という点が問題となる。家集卷三の所収歌の範囲は、「自文永七年至文永八年」とある。つまり、『嵯峨の通ひ』は文永六年の記事内容が記されているが、その中に文永七年から八年に詠まれた歌③が一首だけ混ざっていることになる。雅有は文永六年以降に詠んだ歌を組み込み、「嵯峨の通ひ」

を執筆している。先に挙げた水川氏の「著作年月」に関する見解は推定であったが、文永七年から八年の詠歌が「嵯峨の通ひ」中に含まれているという事実が判明したことにより、『嵯峨の通ひ』の成立時期は文永七年に入ってからであると言う事ができる。季節に関して言うと、『もがみの河路』に記された文永七年冬の下向に至る以前、文永六年の春か夏頃までに『嵯峨の通ひ』は完成を見たものと考えられるのである。

九月二十日に別れの歌を交わしている雅有と書写法眼との関わりで最も多いのは、「転任の事」を巡る記事である。  
 ・(神無月) 廿四日、転任の事、院女房南御方良早公安に申さんとて、その甥の野寄法眼良珍のもとに近ければ、君思ふとはなしに、例の二人連れて、徒歩よりぞ行く。

・(十一月) 二日、転任の事、内々書写法眼につきて、南御方に仮名の申文を付く。昨日、つくる由申さるゝによりて、喜びに、野寄に向かふ。

・廿二日、転任の事に、野寄の法眼のもとへ参でぬ。 (『嵯峨の通ひ』)

近衛少将である雅有は、中将への昇進を望んでいた。申請するための「仮名の申文」を法眼の叔母・南御方に届けるよう、法眼に託している。南御方は大宮院姑子の女房で、大宮院は後嵯峨院后で、後深草、龜山兩院の母である。昇進に際して、大宮院から人事権を持つ龜山院への口添えを願い、雅有は法眼に申文を託した。十一月二日には「喜びに、野寄に向かふ。」と法眼へ礼をした旨を記すが、雅有の昇進はこの年には叶わず、六年後の文永十一年に至るまで昇進の願いは叶わない。法眼への手紙に、「やうくの戯言いひ、下り近き由書きて」と、雅有自身の鎌倉への下向の近いことを書き、別れた後に気付く同じ世の都にいても隔てがあるために、すぐには会えない身であることを嘆き詠む。雅有は「転任の事」がどうなるか分からないままに別れる不安も①の歌に詠み込んだのではないか。東国

へ発つという雅有に対して法眼は、同じ世であっても隔てがあるのはつらいことで、高い峰に雲が懸かるように誰の心から隔てを置きはじめたのでしょうか、あなたが逢つて下さらないのがつらいと詠む。同月二十二日に再び「転任の事に、野寄の法眼のもとへ参でぬ。」とあるため、この贈答歌の場面が法眼の名が登場する最後の場面という訳ではないが、法眼との直接の遣り取りを記す場面は、『嵯峨の通ひ』の中では、この贈答歌の場面以外にない。

「久しく障る事どもありて、会はぬ人」へ雅有が贈った③の歌の本歌は『万葉集』の「湊入りの葦わけ小舟障り多み我が思ふ君に逢はぬころかも（巻十一、題知らず、二七四五、柿本人麻呂）」であり、思い通りにならない恋の嘘えとして、河口に葦を分けて入ろうとする小舟を用いている。『嵯峨の通ひ』の③の歌と家集一四七七の歌との異同は、第五句「ほどをうらむな」と「ほどをうらむる」の最後の一字である。内閣本を底本とした『新編国歌大観』、『私家集大成』、雅有の筆跡に極めて近い最古の写本である高松宮旧蔵・国立民俗博物館蔵『隣女和歌集』の確認を行ったところ、この歌の第五句は「ほどをうらむる」となっている。この異同について濱口博章氏は「底本「うらむ那」であるが、資料館本は「奈」の草書体であるから、字形は「る」に近い。「うらむる」とあるべきところ。」と天理図書館蔵本『飛鳥井雅有卿記事』にある写本と、同系統の国文学研究資料館蔵本の、仮名「な」の字形の違いに着目し、最後の一字の異同の理由は誤写のためで、本来は『嵯峨の通ひ』にも家集の通り「うらむる」とあるべきと述べておられる。

しかし、『嵯峨の通ひ』に第五句「ほどをうらむな」とあるのは、写し間違いなどではない。河口に葦を分けて入る小舟のように差し障ることが多いので思うように逢瀬が叶わず、逢うことが妨げられることを恨みに思わないで欲しい、と相手に懇願する③の歌を、雅有から「久しく障る事どもありて会はぬ人」に宛てた贈歌として配すために、『嵯峨の通ひ』執筆時に最後の一字を意図的に改変し、答歌④とともに、九月二十日の記事に配した可能性が大きい。

いのである。

『嵯峨の通ひ』の雅有詠の歌三十五首のうち、七首が家集巻二に所収されている。雅有の家集は時間の流れと共に、詠んだ歌を配しており、詠んだ時点の形を留めているものである。それに対して『嵯峨の通ひ』は、記事に合わせて歌を配す形をとり、日記執筆時に新たに歌を詠み、家集に所収されている既に詠んだ歌を記事に取り入れることもある。法眼との別れの贈答歌①②に続いて配される③の歌は、家集を見ると、雅有が文永七年から八年に「寄舟恋」と題を定めて詠んだ歌であり、相手を想定した歌ではない。声の間を分けてゆく河口の小舟が進みにくいように差し障ることが多いので、逢うことが妨げられがちになることを恨めしく思うのだという、通ひの絶えたことを恨む、雅有が女性の立場で詠んだ題詠の独詠歌である。家集のままでは、恋人に宛てた贈歌にならないのである。第五句を「ほどをうらむな」とする『嵯峨の通ひ』の③の歌は雅有から恋人と思われる女性に向けて詠んだ、逢うことが妨げられることを恨みに思わないで欲しい、という懇願を込めた歌である。そして続けて、恋人による答歌④を配す。④の歌は、私他に思っている方がいらっしやって、それが妨げとなつていから逢えないのでしよう、と女性から切り返された歌である。

雅有は実際には、家集に所収されている題詠歌一首しか詠んでおらず、回歌を「久しく障る事どもありて会はぬ人」の許へと詞書し、最後の一文字を改変して恋人に宛てた歌③とし、その③に対する答歌として、作品中に④の歌を創作したのではないか。答歌④を詠んだとされる、雅有の贈答歌の相手「久しく障る事どもありて会はぬ人」は、野奇法眼のように「転任の事」で度々『嵯峨の通ひ』の記事に登場することもなく、雅有の周囲の人物と照らし合わせても特定することが出来ない。文永六年に関わりを持ち、現実にあつた野奇法眼との歌の遣り取りの後に、架空の「久しく障る事どもありて会はぬ人」との贈答歌を配した雅有は、この日の記事に一種の別れの場を描き出そうとしたに

違いない。都の親しい人々との別れを作品中に織り込むために、歌によって別れを交わす趣向とし、一日の記事を物的に造型しようとしたものであると考へる。

### 三、記されなかつた講読

『嵯峨の通ひ』の中で、事実に改変が加えられたと考へられる記事は他にもある。

廿九日、今日は秋果つる日なれば、彼処に渡りて会あるべけれど、心地悩ましければ、行かず。さるほどに、いかゞ、今日は大堰河にて秋惜しむ歌よまざらん、と唆す人あれば、乗り具して行きぬ。夕づく日山の紅葉にうつろひあひて、疾き遅き色々見え分かれて、遅れさきたつ露のけぢめも思ひ知る。みぎはの芦の花、岸の雪かと、げにぞ見ゆるや。御所の前なる紅葉の、殊に色深き木のもとを占めて、三首の歌よむ。ともなる人、懐より墨筆取出でたれば、河の水してみぎはの石にすりて書く。人の歌は覚えす。悪けれど、その折の歌なれば、もらさず。

河九月尽

⑤紅葉々の流れもやらぬ堰にも澱まずく、る秋の月波

九月尽恋

⑥我涙けふは忍ばじ人間は、秋に別る、袖と答へよ

九月尽述懐

⑦秋は□きぬ袖は時雨の隙もなしあはれ三笠の山の名もがな

この所にて小倉、嵐をば捨て、三笠の山をしも心ざす事、たよりなけれど、中将を望む頃なれば、そこを託言にて詠めりしかど、今見れば、いづれもみな悪し。消つべくや。  
 (嵯峨の通ひ)

雅有は嵯峨の中院で行われる古典の講読について記しながら、探題和歌や蹴鞠、紅葉狩りをしたとする日のことも記事に載せている。九月二十九日の「秋果つる日」は、体調が優れなかつたため中院には行かず、大堰河で秋を惜しむ歌を詠もうと勧める人がいたので出掛けたと記す。「疾き遅き色々見え分かれて、遅れさきだつ露のけぢめも思ひ知る」の部分は「後撰集」の「題知らず 遅く疾く色づく山も紅葉々は後れ先だつ露や置くらむ(巻七、秋下、三八一、元方)を踏まえ、色とりどりで、どの葉に早く露が置いたのか分かるという。さらに「和漢朗詠集」の「三秋岸雪花初白 一夜林霜葉尽紅(巻上、霜、三六八、温庭筠)の上句の描写と重ねて、「みぎはの芦の花、岸の雪かと」と表している。秋の三ヶ月のことを指す「三秋」であるが、ここでは、そのうちの九月を指す。⑩九月の最終日に見ることのできた秋の情景である、水際の芦の花の白さがまるで初雪が降ったように見えることを記し、続けて「げにぞ見ゆるや」と、なるほど詩句にある通りの情景が見えるものだ、という。さらに同じ詩句の下句の、一夜で林に霜が降り、葉が全て紅になつたという、一瞬を捉えた情景を踏まえ、「御所の前なる紅葉の、殊に色深き木のもとを占めて、三首の歌よむ。」と、亀山御所の前にある紅葉の、とりわけ色が濃い木の下に座り、三首の歌を詠んだという。『後撰集』、「和漢朗詠集」の情景を目の前の情景と照らし合わせるようにし、「思ひ知る」「げにぞ見ゆるや」と記し、雅有の詠歌を三首配す。

この日には「源氏物語」の講読が記されていない。前日の九月二十八日は、「今日は騒がしとて、殊更篝火の巻ばかりなり。」と一卷だけを、二十九日を扶んで翌十月一日は「行幸より楨柱に至る。」と、行幸、藤袴、楨柱の巻の講読が行われた旨が記されている。「源氏物語」の巻は、篝火―野分―行幸―藤袴―楨柱の順に並ぶ。雅有の記した内

容を見ると、五十四帖のうち、野分巻のみ講読が行われたことを記していない。講読の合間に出掛けた大堰河遊興の様を記したようであるが、抜けた野分巻の講読の代わりに大堰河に出掛けたとする記事にしているのである。文永六年の九月は小の月で、太陰暦で小の月は二十九日が月の最終日であるため三十日は存在せず、翌日が十月一日となるのは間違いない。『源氏物語』の講読は、九月十六日に「明日よりは源氏を始むべき由を語らふ。」とあるように、雅有が自ら願ひ出て、為家がその要請に応じて行われることが決まったものである。雅有が不在の時に、中院で講読が行われ、野分巻の講読が終わってしまったとは考えられない。

実際には、この九月二十九日に、『源氏物語』野分巻の講読が行われていた可能性が大きい。野分巻の講読について記さず、一日分の記事で大堰河に出掛けたという内容を充てたのである。大堰河を訪れたとする翌日は月が替わって十月一日となり、暦の上も、目に見える景色も冬となる。「行幸より楨柱に至る。」と、『源氏物語』の行幸巻から講読が再開され、「今日は冬立つ日なるに、いつしか気色ばかり時雨で、軒の紅葉の争ひ落つるも、うちつけなりと覚えて、艶あり。あるじもいと興じて、心に籠めて頭さざらん事いと耐へ難しとて、冬五十首の題を探りて詠む」、時雨模様で軒の紅葉が争うように散り落ちるのも季節に合っており、風情があると記す。暦が替わり、一夜で冬の情景である。前日に大堰河で見た見事な情景は、「秋果つる日」を逃してしまえば、見るのできなかった情景であった。伴っている人が懐から墨と筆を取り出したので、水際の石で墨をすって書く。人の歌は覚えておらず、出来は悪いが、その折に詠んだ歌なので省くことなく載せるという。雅有は「秋果つる日」に大堰河を訪れたことで、こうした秋の情景を見ることができたということを強調している。

⑤から⑦の雅有詠の三首は、大堰河の景物を用いた題詠である。まず、⑤の「河九月尽」の歌である。紅葉葉の流れきれない堰があったとしても、澱むことなく、河を括り染めに行っている「秋の月波」であることだ、という。第五

句の「秋の月波」は、

屏風に、八月十五夜池ある家に人あそびしたる所 源順

水の面に照る月なみをかぞふれば今宵ぞ秋の最中なりける

〔拾遺集〕三、秋、一七二

「水面に映った月」と、毎月、あるいは月の順序を表す「月次」の意を併せた意である。⑤の歌でも、月が映った河という実景と、秋の月日が経つことを併せて詠んでおり、月の流れが留まらず、惜しんでも九月は終わってしまうのだ、という感慨が見える。続く⑥の「九月尽恋」の歌は、第一句で「我が涙」と、呼びかけの形をとる。私の涙よ、今日は流れるままにしておこう、もし人が涙の理由を問うことがあれば、秋に別れる涙で濡れた袖なのだと言えない、という。秋が去ってしまうことを悲しんでいるのであり、逢えないこと、あるいは失恋のために流す涙ではないのだ、とする。最後に⑦の「九月尽述懐」の歌は、秋が終わってしまい、冬に降る時雨で濡れる袖は乾く間がなく、袖が濡れるのを遮るための笠が欲しいという。雅有の望む笠は、「三笠の山」の名を持つている。「三笠の山」は近衛府の異称で、少将、中将を指し、文永六年当時、正四位下で近衛少将である雅有は、雅有は中将への昇進を望む心をこの歌に託している。「三笠の山」は、奈良にある山で、山麓には藤原氏の氏神を祀る春日大社がある。当然、京都の嵯峨から見ることはできない。そのことを、⑦の歌の後で触れ、小倉山、嵐山を臨みながら、それらを題材とせず、「三笠の山」を心にかけることは、拠り所のないことであるが、中将を望む頃であったので、それを託して詠んだのだと注記している。

家集には、⑤、⑥の歌は所収されていない。この日の記事では唯一、⑦の歌が家集巻二に所収されている。

述懐

869 秋はいぬ袖は時雨の隙もなしあはれ三笠の山の名もがな

〔隣女和歌集〕二、雑

同じ歌なのだが、題は「述懐」である。雅有はこの「述懐」の歌を「九月尽述懐」の題に変え、さらに第一句を「秋はいぬ」から「秋は尽きぬ」<sup>13</sup>に変えている。こうして、九月の最終日に詠まれたとする「秋惜しむ歌」の中に組み込んだのである。この歌が詠まれた時期は、家集巻二が、文永二年から六年までの雅有の詠歌が所収されていることから、「嵯峨の通ひ」の他六首の家集と共通する歌と同様、文永六年の歌である。家集には所収されていない、⑤の「河九月尽」、⑥の「九月尽恋」の歌は、この日の記事に合わせて、「嵯峨の通ひ」執筆時に作歌したものと考えられる。

探題の歌が詠まれた日は、「嵯峨の通ひ」に二日ある。「月百首の題を短冊に書き、もとより置かれたり。もし訪ふ人も侍るとて、これを使用して候ひつる。渡り給はずは、甲斐なからましとて、取出たり。各々皆、籤配りに取りて詠む。ことごとくは覚えず。耳に留まりしは」と、九月十三日には、主人（為家）、女あるじ安嘉門院右衛門佐（阿仏尼）、侍従基長（雅有弟）、愚詠（雅有）の歌が配される。十月一日に行われた冬五十首の探題の歌も、主人、女あるじ、法眼良珍、雅有の歌が配され。いずれもこの日参加した歌人たちの歌も併せて記している。九月十三日の記事にある、月百題の歌の場合は、「このほかの人々の歌、またなほ歌数はありしかど、覚えずなりしかば書かず。」と雅有は記し、歌数が多くあり、覚えきれなかつたので書かない、とする。百首歌のうち、十四首を書き記した上での、この注記である。十四首の内訳は、為家が六首、阿仏尼が四首、侍従基長が一首、そして雅有自身の歌の三首を含めたの十四首であり、雅有詠の歌のみを記すということはしない。同じ注記であるのに、「人の歌は覚えず」と書く、大堰河の記事は、常の雅有の注記とは異なる。併せて、「悪けれど、その折の歌なれば、もらさず」、「今見ればいずれも皆悪し。消つべくや。」と記す部分も、三首の歌を省くことなく載せながら、言い訳めいた書き方をしている。

「いかに、今日は大堰河にて秋惜しむ歌よまざらん、と唆す人あり。」と、大堰河遊興の契機となった人物、同一人物であろうか雅有と共に出掛け、懐から墨と筆を取り出した「ともなる人」は歌を残していない。雅有の周囲の人物と

照らし合わせても、特定の人物には行き当たらず、雅有がこの日、大堰河に実際には出掛けていないとすれば、雅有の手による作中人物ということになるのではないだろうか。先に挙げた十一月二十日に、独詠歌を贈答歌へと改変した際の、「久しく障る事どもありて会はぬ人」と同じように、雅有は架空の人物を登場させたのである。

大堰河で九月に和歌を詠むことは、宇多天皇の大堰河行幸に遡る。「古今著聞集」には、紀貫之の手による仮名序が残されている。

亭子院の御時、昌泰元年九月十一日、大井川に行幸ありて、紀貫之、和歌の仮名序書けり。あはれ、わが君の御代、なが月のここぬかと昨日いひて、のこれる菊見たまはん、またくれぬべき秋を惜しみたまはんとて、月のかつらのこなた、春の梅津より御舟よそひて、わたしもりをめして、夕月夜小倉の山のほとり、ゆく水の大井の河辺に御ゆきし給へば、久かたの空にはたなびける雲もなく、みゆきをさぶらひ、ながるる水ぞそこにこれる塵なくて、おほん心にぞかなへる。

〔古今著聞集〕卷十四・遊覽<sup>14</sup>

雅有がこの日に大堰河に出掛けたとする描写は、仮名序に「くれぬべき秋を惜しみたまはんとて」とあるのを受けて、雅有は「いかゞ今日は秋惜しむ歌詠まざらん」と言う人の言葉を記し、表現を仮名序と重ね、「夕づく日、山の紅葉にうつるひありて」という表現も、仮名序の「夕月夜」を受けてのものではないか。さらに、表現の上で準えたということも勿論あるが、それだけではなく、仮名序にある「くれぬべき秋を惜しみたまはん」という言葉から、九月の最終日に日を設定し、「夕づく日」と記した時間帯も、仮名序の「夕月夜」を受けて定めたものであると解したい。古典の講読のために嵯峨に通う雅有は、嵯峨に近い大堰河に当然出掛けたことがあるであろう。しかし、その日は九月二十九日ではなかった。この日の記事を作り上げるために、大堰河行幸の仮名序を踏まえ、時刻と日付の設定を行っ

たのである。引歌や漢詩も用い、この日に掛けたことにより見ることが出来た情景を描き出したのである。

野分巻の講読の後に、大堰河に出掛けたと記しても良かったはずである。しかし、雅有はそれをせず、一日分の記事に大堰河で見たとする情景を記した。雅有は、「秋果つる日」を書き留めておきたいという思いから、この日の記事を記した。それは贈答歌を連ねて別れの日を演出した日のように、印象的にこの日記作品を記したいと考えたからである。

#### 四、おわりに

文永六年の記事内容に構成を加えて、文永七年の春か夏頃までに、「嵯峨の通ひ」は成立したと考えられる。雅有は「隣女和歌集」巻三にある歌を、独詠歌から贈答歌へと改変し、「嵯峨の通ひ」に多く登場した野寄法眼との贈答歌に続けて配すことで、歌によって別れの場面を描き出そうとした。また別の日には、実際には行われていたであろう「源氏物語」の講読を記さず、大堰河に出掛けて見た「秋果つる日」の情景を記す。その一日を逃してしまえば去ってしまう秋の情景を、何とかして日記作品中に残そうとしたのである。風流な世界を描き出そうとする一方で、「転任の事」は雅有の心から離れることはなかった。大堰河に出掛けないか、と「唆す人」、共に風雅の一端を分かち合った「ともなる人」は、雅有の分身ではなかったか。「嵯峨の通ひ」は虚構を含む作品であり、従来考えられてきた記録としてだけでなく、印象的、物語的に雅有が記そうとしているのである。

注

(1) 底本は、水川喜夫著『飛鳥井雅有日記』(勉誠社文庫一三六、一九八六年)に影印が収められている。「飛鳥井雅有卿記事」天理図書館蔵本を用いる。仮名の本文に漢字を充て、底本本文はルビとして示し、本文には無い送り仮名には中黒(・)をルビとして示した。虫損の箇所は□を文字数分、充てている。①から⑦の歌番号は本稿中の通し番号である。

(2) 水川喜夫著『飛鳥井雅有日記全釈』(風間書房、一九八五年)六十八頁

(3) 杳名和子氏は「もがみの河路」の下向時期について、まず『隣女集』にある三首の歌、

將軍從三位左中將になり給ひて正月一日

三笠山みもとの松の若みどり千代にさかえむ春ぞ来にける

同日雪降り侍りしに出仕し侍るとて

春の来る庭のしら雪ふみわけて道ある御代に出でつかへつつ

十二月つごもりごろ京よりまかり下り侍りて元日に

みやこをば霞へだててふる里に年とともに立ち帰るかな

を挙げ、「八九〇の詞書にある將軍とは、宗像親王の子惟康親王であり、惟康親王は文永七年十二月二十日從三位に叙せられ、同日左中將に任ぜられた(公卿補任)。だから、八九〇、八九一の詠まれたのは、文永八年の元日である。八九二も隣女和歌集の編集状況からみて、同じ時に詠まれたと思われる。すると、文永七年十二月に彼が京都から鎌倉へ下向したことがわかる。」とされ、続けて、『隣女集』卷三の歌を挙げ、

忘れずよごぞの今宵は都にて小倉の山の月を見しかな

(卷三、秋、一二二〇)

「ごぞの今宵」とは、文永六年の為家の許で見た月夜を指していると思われる。とすると文永七年の九月には鎌倉にいたことがわかる。放生会に出席し、そのまま幕府に出仕していたものと思われる。その後間もなく京都へ向けて出発し、その年の十二月には鎌倉へ向かう旅路についたことになる。」と述べておられる。「飛鳥井雅有日記」成立論(『愛知大学国文学』一九七九年三月)

(4) 『隣女和歌集』の引用は内閣文庫本を底本として校訂された『新編国歌大観』に拠る。同じ内閣本を底本とした『私家集大成』と、群書類従本は完本が残されている。また、巻一が欠けているが、雅有の筆跡に極めて近い最古の写本が、高松宮旧

蔵・国立歴史民族博物館蔵本であり、異同の確認の際これらを参考とした。

(5) 引用は「新編 日本古典文学全集」八(小学館、一九九五年)に拠る。

(6) 中川博夫氏は「国立歴史民俗博物館蔵本(H160001189/M120)三帖は、巻一を欠くが、鎌倉時代の書写にかかる最古の伝本である。他撰雑纂家集の『別本隣女和歌集』の原本かそれに極めて近く書写されたと推測される天理図書館本の成立時に、同じ手によって書写されたとみられる貴重な善本である。」とされる。最古の書写本であり、雅有の自筆の様を残す伝本であるとする。「歴博本『隣女和歌集』翻印」(『鶴見大学紀要』第一部国語国文学編、第四十三号、二〇〇六年三月)

(7) 浜口博章著『飛鳥井雅有日記注釈』(桜楓社、一九九〇年)

(8) 国文学研究資料館本は天理図書館蔵本を底本として書写したものであると思われる。

(9) 佐藤恒雄氏は、雅有最初の日記作品である「仏道の記」について「家集の詞書や歌の配列が事実そのままであるという保証はどこにもないが、月もない降雨中の夜の海上へ船をくり出すことが現実的でないことを勘案するならば、事実は家集の自然さの方にあつたと思いたくなる。伊勢物語の一場面をふまえた行文ともども家集との比較の上で億断すれば、この部分で雅有は、事実を曲げることをいとわず、現実を再構成しなおして、より劇的で印象的な効果をねらったのだと考えざるをえない。(飛鳥井雅有「無名の記」私注―作為または虚構について―)〔中世文学研究〕第七号、一九八一年八月)と述べておられる。これと同じ構成意識が「仏道の記」の次の日記作品「嵯峨の通ひ」についてもはたらいたものと考ええる。

(10) 「和漢朗詠集仮名注」(伊藤正義・黒田彰共編著「和漢朗詠集古注釈集成」第二巻下、大学堂書店、一九九四年)には、「時二、九月ノ末ニ、通夜セリ。次ノ日ハ、冬ノ節ニ入。其ノ心ヲ作ル也。三秋ハ、々三月也。而レトモ、今ハ九月ト可心得也。心ハ、九月ノ末ナトニ、此コ彼コノ岸ニ、霜ノフリタルヲ見テ、余リニ興アル故ニ、雪ノ花、初テ開クニ似リト也。」とある。「三秋」は秋の三月のことであるが、ここでは九月のことを指し、九月の終わりに一夜で秋の光景が冬に変わってしまう情景を表す。雅有は見たとする情景を、この詩句と重なり合わせて記したのである。

(11) 「古代中世暦 和暦・ユリウス暦 月日対照表」(日外アソシエーツ、二〇〇六年)で確認すると、文永六年(己巳)九月の最終日は、二十九日(壬申)とある。

(12) 「能因歌枕」に、「みかさ山、中少將をよめり。」とある。(佐佐木信綱編「日本歌学大系」第一巻、風間書房、一九六三年)

八十三頁。

(13) 日記中③の歌は、「秋は□きぬ」と虫損の箇所がある。雅有の後裔の雅威が朱書きで「つ歟」と注している。「秋はきぬ」では九月最終日の記事に合わないため、「秋は尽きぬ」を採る。初句が六文字となり字余りであるが、この点は鎌倉時代の為家の歌学書「詠歌一鉢」(福田秀一・佐藤恒雄校注「歌論集一」、中世の文学、三弥井書店、昭和六十四年)に「いかにも餘さでかなあまじき時は、餘りたるも聞き難からぬは幾文字も苦しからず。

歳経れば齡は老ぬしかはあれど花をし見れば物思もなし

ほのくくと在明の月の月影に紅葉吹きおろす山おろしの風

此字どもは、いづれも秀れたる哥なれば、字の餘りたるによりて悪く成ぬべきにあらず。しなし様の手づつなるゆゑに聞き難き也。」とある。

(14) 本文引用は、新潮日本古典集成「古今著聞集」上、下(新潮社、一九八三年)一四七頁、四七九「亭子院の御時、大井川行幸に紀貫之和歌の仮名序を書く事」(卷十四、遊覽)に拠る。